

海外技術協力ボランティア飛び歩き
－JICA－SV として滞在したホンデュラス、マレーシア、サモアにて

宮尾眞矢子
(203D0368)

研究の目的と方法

「開発」について体系的に学びながら自分の過去の経験をフィードバックして考察を行うことを研究の目的とした。

ホンデュラス（国立職業訓練庁）、マレーシア（木材産業局、技術向上センター）、サモア（サモア国立大学教育学部技術教育科）の三つの国営職業訓練関連施設に技術指導員として派遣され、途上国への技術移転に貢献する機会を得た。しかし結果としては、全く無駄であったとは思わないが効果的であったとも感じられず、振り返ってみると自分の活動は砂地に水をまいた程度のもので、技術移転が浸透したとはとても思えないという印象を拭いきれなかった。国の税金を使って派遣され、時間、技術、知識、体力を注ぎこんできたわけだが、受け入れる側のシステムの中では、「費用」をつぎ込んだ割には効率的には機能しなかったように思える。

技術移転を円滑に進めるためにはこのような支障のあるシステムを変えていかなければならないが、具体的な改善としてどのようなことが可能なのか、変化を促すことはできるのか等、現地で考えることは多かった。

しかしながら、最も強く感じていたことは、このような自分の活動と目の前にある「途上国の貧困の問題」が、直接に結びつかず、「貧困」の構図が掴めないまま時間に追われ、日々の活動を行っていたという反省であり、あまりにも無知で恥ずかしいという反省であった。もっと、貧困の中身を知らなくてはならない、世界的な視野で途上国の貧困を捉えていかななくてはならない、もっと勉強しなくてはならないという気持ちが強く高じてきた。

幸いにも、国際社会開発を勉強する機会が得られ、「開発」について、様々な方面から考察、研究を行うことになった。この研究を進めると同時に過去の経験を改めて考察することで、自分自身の洞察力、解明能力を高めていきたいと考えた。

研究の方法は、自身の海外技術移転に関わった3カ国の経験を自叙伝的にまとめる作業と、「開発」に関する研究の整理であった。はじめに、このような機会に自ら飛び込むまでに、どのような経緯、外国との関わりがあったのか記述し、次にホンデュラス、マレーシア、サモアの3カ国での、職場と日常生活で直面した事柄を記しておいたものを、時間を追って整理した。最後にこれらの体験を通して見聞きしてきた途上国の現状は、世界的な視点から見るとどのような構造の中にあるのか、「開発」に関する考え方の潮流をとらえ、国際社会の中での「開発」のありかた、抱える問題についての学びを通して自分の考えを整理した。

論文の構成

プロローグ

1. 「外国」との出会い
2. 外国の友だちと言葉
3. ボランティアで海外へ
4. 途上国は学歴社会
5. 台湾への出稼ぎ
6. 居候さん

第1章 ホンデュラスに暮らす

1. ホンデュラスの印象
2. 職場について
3. 生徒になってくれた先生たち
4. 家具製作現場の印象
5. ホンデュラスのフェスタ
6. クラウディアの結婚式
7. 誘拐？騒動
8. INFOP EXPO'95 のこと
9. サンタバーバラの出張みやげ
10. 水不足
11. コーラと菓子パン
12. お手伝いさんのこと
13. 男と女の関係
14. 犯罪事情
15. 金銭のやりくり
16. ミリアムさんのこと
17. ヌエバ・スヤパの貧困プロジェクト
18. カリブ海の休日
19. ホンデュラスの2年間

第2章 マレーシアに暮らす

1. 住宅探しと通勤の足
2. 衣食住について
3. 勤務先について
4. 家具産業の現状
5. ブミプトラ政策とイスラム教
6. 豪勢なワークショップ
7. マレーシアの人との関わり
8. 職場の勤労奉仕
9. パンク事件
10. 強まるイスラム色

11. アスリの結婚式
12. ポルノ事件
13. 誰でも講師？
14. マレーシア惚け？
15. マレーシアでの2年間

第3章 サモアに暮らす

1. 配属先の沿革と要請の背景
2. 一体何をしたら良いのやら
3. サモアの人と生活について
4. 社会システム
5. 生徒と技術指導
6. カウンターパートについて
7. デング熱
8. 空き巣事件とサモア人気質
9. 身近なサモアの有名人
10. 性教育カウンセリングクラス
11. サモアの苦学生たち
12. 信仰と伝統的慣習について
13. 変わるアピアの町
14. サモア経済発展の可能性
15. サモアの3年間

エピローグ

1. もっと世界のことが知りたくて
2. 開発について
3. 貧困をまなぶ
4. 今何が優先されるのか
5. 経済開発と技術支援について
6. 私にできること

論文の概要

本論文は、技術協力のボランティアとして滞在した、3カ国での経験を中心として書かれているが、その経験に至るまでの年月を含めた自身の海外生活の記録でもあり、また、その経験を踏まえて、世界が抱える貧困の問題、開発のあり方についての考察を記したものである。

構成は、プロローグと3つの章とエピローグに分かれている。

プロローグでは、海外に目を向けるきっかけとなった初めての外国への旅から、JICA シニア海外ボランティア(当時の名称はシニア協力専門家)としてホンデュラスへ派遣されるまでの、24年間の過程と思いを綴った。

初めての外国、ソ連、欧州への旅は、費用も時間も限られていたが、私に自分の足で歩き、見て、感じ、考えることの大切さを教えてくれた。この初めての旅をきっかけに、世界の国々、人々に関心が向くようになり、ロシア語、英語の勉強も始めた。

その後、青年青海外協力隊員として、建築、内装製図の分野で、2年間という長期の活動をバングラデシュで経験することになった。そこでの日常生活はベンガル語であった。イスラム教国であるが、専門職の女性の社会進出は日本より進んでいると感じられた。はじめての海外での仕事は非常に実りあるものであったが、同時に、途上国の学歴社会の壁を思い知らされた。

民間の海外勤務として台湾の建築現場で働く機会を得たが、この国でも、女性たちは、生き生きと自信を持って仕事をしていた。バングラデシュと台湾での長期海外勤務を通して、改めて日本女性の社会進出の遅れと、立ちふさがる壁に気付かされ、自分にとっては海外の方がずっと働きがいがある、という思いを強くするようになった。

公私を含め海外へ出かける回数が増えるにつれ、様々な国の様々な考えの人たちとの交流が深まり、多くの海外からの友人たちが我が家に「居候さん」として住みついた。大して広くもない家での共同生活はストレスも楽しさもあったが、その時その時の関わりや、ひとつひとつの出来事が、私に忍耐力をつけ、視野を段々と広くしてくれたように思う。

第1章では、ホンデュラス国立職業訓練庁に派遣されていた1995年から1997年までの2年間の体験を綴った。

ホンデュラスは日本から見ると地球のほぼ裏側で、スペイン語という私にとって全くなじみの無い言葉話す国であったが、同業に従事する同僚たちとの日々は楽しかった。途上国の人は怠け者であると聞いていたが、ここでは全く当てはまらない。働けど、働けど貧乏な人たちであった。

人が生活するところ、どこにでも、喜びも悲しみも、苦勞もある。喜びの有りようはどこでも似ているように思うが、悲しみと苦勞は貧しいところほど深く、幾重にも重なり、その姿はどれとして同じものは無いと感じた。

第2章では、マレーシア木材産業局技術向上センターに派遣されていた1998年から2000年までの2年間の体験を綴った。

クアラルンプールは一見、先進諸国と変わらない大都会で、なぜこのような国に日本政府は援助を行っているのかと、首を傾げるが、実際に暮らしてみると、目に見える器や建物ばかりが立派でも機能、内容が伴っていないと思わされることが多かった。

木材産業のための技術向上を目的とする、職場であったが、この分野の専門スタッフは配置されておらず、事務系高給職員ばかりで、長年のブミプトラ政策による弊害があちらこちらで見受けられた。マレーの人たちは親切で、寛容であるのに、社会システムがこのような愛すべき人々を怠惰に追いやっているのではないかと感じた。

第3章では、国立サモア大学教育学部技術科に派遣されていた2000年から2003年までの3年間のサモアでの体験を綴った。

南太平洋に浮かぶ島国サモアは、自然が豊かで旅行者として訪れるにはよいところで「最後の楽園」と表現した日本人紀行作家もいた。人々は笑みを絶やさず、一見は穏やかであるが、暮らしてみると、楽園どころではない厳しい現実があった。そこでは、マタイという酋長システムの下に生活が組み込まれ、民主主義が育たない土壌があった。職場では、大学という場所柄、教師陣はマタイシステムの高位にある人たちばかりで、非常に誇り高く、「ボランティア」という身分が仕事をやりやすくしていた部分があった。

エピローグでは、長年途上国の技術援助に関わりながら、世界の流れが掴めないという反省から、「開発」について学び始めたいきさつ、貧困について考えたこと、今、何が優先されなくてはならないのか、私にできることは何か、等の考察を綴った。

三つの途上国の活動を通して様々なことを見聞してきたが、政府間取り決めによる派遣という性格上、その国の、中、上層階級に属する強い立場にある人たちとの業務上の接触が多かった。そのため、途上国にいながら、弱い立場にある貧困階層に属する人たちとは隔たったところに身を置いてきた。途上国で何年も暮らしても、私に見えるものは、ほんの一部分でしかなかった。もっと途上国について知らなくてはならない現状がたくさんあるはずだ、もっと勉強しなくてはいけない、という思いは自分の中でどんどんつのっていった。しかし、具体的にはどのように取り組んでよいのか、派遣前のオリエンテーションで得られる断片的な知識は、本当に知りたいこととはかけ離れていると感じられたし、書店で行き当たりばったりで購入する本は、時にはレベルがあまりに専門的過ぎて私の理解の範囲を超えていて、とても自力で体系的に勉強していくことは難しいと感じていた。

そんな折、「開発」を研究するための通信制大学院の存在を知り、そこに学びの場を持つことができた。インターネットを使つての課題への取り組み、先生や、世界中に散らばっている開発現場の第一線で働くクラスメートとの交流は新鮮であった。中にはかなり難解な課題もあったが、このユニークなシステムを駆使しての「開発」についての様々な方面からの勉強は、無知な私に、途上国を考えるための大きなヒントを与えてくれた。

この学びを通して、「開発はだれのためなのか」という問いの答えを考えるうちに開発の視点は、その地域で一番困窮しているひとに置かれなくてはならない、ということを理解したが、同時に、それを行うには障害が多く容易なことではないだろうということにも気づかされた。そして、この容易でないことに知恵を絞り、人々が協力しながらそれを成すことが「開発」なのではないかと思ひ至るようになった。

この研究と、過去に暮らした途上国での体験を合わせて考える時、過去の時点では気がつかなかったことや、見えなかったことが、見えてきたように思う。世界の流れの変化、ということもあるが、関心を持って勉強しないと見えてこないものが、世の中にはたくさんあるということに、改めて気付かされた。